《モスクワ・アラカルト51》

ウラー！ついに「ソ連歌謡本」出版へ

日向寺 康雄

平成最後の年の瀬に、実に興味深い本が出た。『ソ連歌謡　共産主義下の大衆音楽』（蒲生昌明著・パブリブ）だ。この勇気ある出版社は、おととしすでに『共産テクノ　ソ連編』というこれまたユニークな本を出し、熱烈な音楽ファンや共産主義者ならぬ『共産趣味者』を自称する若者達に注目され支持された。ソ連という体制と社会の中で生まれ、独自の進化を遂げたテクノ音楽は、西側のそれとは自ずと異なった独特の雰囲気と魅力に満ちている。蒲生さんは、今回本を出したきっかけについて、次のように話してくれた―「テクノ本の著者を迎えたイベントに参加したのだが、大変盛況で若い世代の参加者も多かった。私は、そうした人達に，まだまだ知られていないソ連時代の音楽や文化の魅力を知ってもらいたかった。テクノ限定ではなくロックや歌謡曲等、ソ連でどんな歌が歌われ、聞かれていたのかをコンパクトにまとめた本があって然るべきと思った。」 実は蒲生さんは、私が働いていた『モスクワ放送』及び『ロシアの声』のありがたいウルトラ（？）リスナーだった。高校生の時、自宅のラジオに偶然入感したのがきっかけで放送を聴き始め、ソ連が崩壊した後も、短波中波放送が中止されインターネット放送だけになってからも変わらず見捨てず、何と45年にわたり聴き続け、私達を励まして下さった。特に音楽番組『ミッドナイト・イン・モスコー』や『モスクワミュージックマガジン』の常連で、リクエストばかりでなく中身の濃い、音楽愛に溢れた感想をしばしば寄せて下さった。そんな彼が書いた本が、面白くないわけがない！氏は、自著の特色について「ソ連の音楽といえばクラシック、民謡、うたごえという先入観に真正面から挑み、いろんな種類の音楽がソ連にあった事実を取り上げている点だ。そして、映画音楽を通して日本では未知のソ連のコメディも紹介し、また、ロシア以外の国や民族、イスラム圏の音楽も取り上げた。これに私自身のソ連での見聞やモスクワ放送を聴取した話も随所に散りばめたので、単なる資料ではなく、今はなきソ連という国の生き生きとした空気の一端を知ることができると思う」と語っている。

ソ連邦崩壊から早27年。音声放送が終了し、私が一身上の理由で日本に戻って1年半。日ソ日ロの架け橋になりたいと願って自分が30年関わった仕事が、この素晴らしい本が世に出る助けになったのだとしたら、これほど嬉しく光栄な事はない。なぜなら『鉄のカーテンの向こう側に住む人々も、愛すべき同じ人間であり、同じように喜怒哀楽を感じ、平和と幸せを願っている。普通の生活者同士はきっと分かり合える』-そう伝え続ける事が最大の使命だと私は信じてきたからだ。その意味で、今この時期こうした形で、他ならぬソ連の大衆歌謡が紹介されるのは意義深い。プガチョワではないが、オーチン・ハラショー！と叫びたい。

（モスクワ放送元チーフアナ・現在大学非常勤講師）